

世界平和こそ人類最大の願い



今、欧州や中東をはじめ世界各地で紛争が起き、学校や病院などまで破壊され多くの子どもや市民が犠牲になっています。核使用による脅しまで平然と言う国まで出てきています。人類の危機とも言えます。

○日本被団協にノーベル平和賞

ノーベル委員会が選んだ理由の一つは、核兵器のない世界の実現に尽力してきたこと。もう一つは、核兵器が二度と使われてはならないと証言してきたことです。被爆者の存在は「唯一無二」だとしています。

ノーベル委員会のフリドネス委員長は、「目の前の大きな困難があっても、一人ひとりの力によって、世界をより良い方向へ形作ることができます。広島と長崎への原爆投下後、過去 80 年近く戦争で核兵器が使われなかったことも、被爆者一人ひとりの尽力があったからですと述べています。この言葉は、被爆者をはじめ世界平和を求め活動する人々にどんなにか勇気と希望を与えたことでしょうか。同時に、核兵器廃絶のためには、世界中の一人ひとりが声を上げる必要があるとも言っているのではないのでしょうか。

被爆者の山口さんが、1982 年、国連で「ノーモア・ヒバクシャ」と世界に叫んで懸命に訴えた映像を思い出します。

○世界に核と戦争を伝えてきた「原爆の図」

1945 年 8 月 6 日、広島に人類最初の核兵器、原子爆弾が投下されました。広島出身の丸木位里さんと妻の俊さんは数日後に現地に入り、そこで目にした惨状や多くの被爆体験者の証言をもとに、夫婦共同制作で「原爆の図」を描き、国内各地や世界 20 カ国以上をまわり巡回展を行いました。その結果、多くの人が核と戦争の恐ろしさを実感することとなりました。

私は、1980 年代に「平和の旅」に参加し東松山にある丸木美術館に行き、「原爆の図」を見ることができました。そこには、見る人々に問いかけるメッセージがあるように思えました。俊さんには、横須賀にもお出でいただき講演を聞く機会に恵まれました。そのとき、鳩の絵の中にある母子の絵を筆で書いていただきました。この絵はたんなる平和母子像ではなく、原爆の悲惨を象徴する悲しい母子像であり、原爆で亡くなった人々へのレクイエムです。絵を見るたびに平和を願う俊さんのやさしい人柄と笑顔を感じます。

当教育会館は設立 60 周年を迎えました。今日まで「平和を願い教育文化の発展を！」をテーマに活動をしてきています。平和なくして教育文化の発展も子どもの未来と幸せもないからです。日本国憲法の第一の精神も平和主義です。今後も、地域から平和を願い教育文化の発展を期したいと思います。